

令和7年度 日本史学科
学校推薦型選抜・特別選抜 小論文 出題の意図

問題文の出典：小塩慶「『唐風文化』から『国風文化』へ、は成り立つのか」有富純也編
『日本の古代とは何か 最新研究でわかった奈良時代と平安時代の実像』光
文社、2024年。一部改変。227～231頁。

限られた時間の中で、出題された長文を読み解きながら自ら思考し、それを論理的に表現
できているかを問うものである。

問1

- 1) 設問の趣旨を的確に捉えているか。
- 2) 課題の在所を把握し、適切に絞り込んでいるか。

問2

- 1) 具体例と関連させて説得力をもって論じているか。
- 2) 文章を整然とまとめ上げているか。

※ この「出題の意図」についての質問及び照会には、一切回答しません。

学校推薦型選抜・特別選抜 小論文 問題用紙

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

かつて国風文化は、宇多天皇の治世の寛平六年（八九四）の遣唐使廃止を契機として生まれたと説明されていた。遣唐使がなくなり中国文化が入ってこなくなること、日本独自の文化が芽生える、と考えられてきたのである。

今でも根強い理解かもしれないが、じつはこの説は、遅くとも一九七〇年代には否定されていた（中略）。近年では教科書の記述も改められてきている。国風文化は、日本史の教科書の中でも、ここ数十年で特に大きく記述が変わった箇所の一つである。

この古い理解には、幾重もの誤解が含まれている。それを一つずつほぐしていこう。

（見出し中略）

まずは、「寛平六年の遣唐使の廃止によって、中国文化が入ってこなくなる」ことを契機と考えるのが、大きな誤りである。

Aこの箇所には、さらに二つの誤解が含まれている。

一つ目として、遣唐使は寛平六年に「廃止」などされていない。廃止説の根拠は『日本紀略』（注1）の「其の日、遣唐使を停やむ」という記事だが、「其の日」とは現代語の「某日」に近い用法で、特定の日に遣唐使計画が中止されたとはいえないのである（中略）。事実、この後も遣唐使の長官であった菅原道真らは遣唐使の肩書を使い続けている。

この頃たしかに道真は、計画の見直しを提言してはいるが、計画の中止が決定されたわけでも、ましてや未来の遣唐使の派遣を含めて廃止することが決まったわけでもない。実際のところは、さまざまな要因で、計画が実行されずじまいに終わったようである。「白紙（＝八九四）に戻す遣唐使」という語呂合わせは、現在では成り立たない。

二つ目として、遣唐使がなくなっても、中国文化が入らなくなったわけではない。この時期には海商が多数往来しており、遣唐使を介さずとも、大陸から唐物からものと呼ばれる品々を輸入することができた。輸入量はむしろ遣唐使の時代よりも増大したと考えられている。渡航を希望する僧侶は、こうした商人の船を利用して中国に渡ることもできた（中略）。貴族たちも、海商や僧侶から最新の中国（唐の滅亡後、五代十国の時代を経て宋が中国を統一する）の情報を得ることができた（中略）。このように九世紀末の段階では、遣唐使の存在意義はかなり低下していたのである。

以上を踏まえると、寛平六年の遣唐使をめぐる一連の動きをきっかけとして文化状況が一変したとは考え難い。前節（注2）で確認した通り、国風文化につながる要素は、それ以前の九世紀後半の段階で、すでにかなりはつきりと姿を現していたことを思い出していたきたい。

もともと、寛平六年の一件はそれほど重要でないにせよ、遣唐使という国家間の公的な使節がなくなること自体は、文化動向に少なからぬ影響を与えたものと考えられる。

それは、かつてのような体系的な文化移入が難しくなり、文化が断片的にもたらされるようになることを意味する（中略）。交易や仏教界の交流は続くが、日宋間で国家同士の正式な外交は開かれなかった。このため日本では、仏教世界の文物を受容しても、宋皇帝が作り上げた文物の世界が受容されることはなかった。同時代の遼や高麗りょう こうらいと比べると大きな違いである（中略）。高麗が宋を規範としていくのに対し、平安時代の日本が宋文化を全面的には受け入れず、むしろ唐文化にこだわった一因と考えられる。

また、正式な使節がなくなることは、ほとんどの日本人にとって中国に赴く機会が失われたことも意味する。一〇世紀以降、官人層の誰も本当の中国を見たことがない時代が始まる。数百人規模の日本人が中国に渡った時代とは、やはり状況

は異なっている。この時代も大陸との交流は続くが、遣唐使の時代とは質的な差があることに留意しておきたい。

(見出し中略)

次いで、そもそも国風文化は和 いっぺんしゅう 一辺倒の文化なのか、という問題がある。同様のことは、それ以前の唐風文化にもいえる。

先述(注3)の通り「国風暗黒時代」にも和歌の伝統が途絶えたわけではないし、九世紀に儀式や服装が唐風化するといっても、神事などでは古くからの日本的なあり方が残されたことが分かっている(中略)。何もかもが唐風化したわけではないのである。

また唐を模倣するといっても、日本側で取捨選択したり、日本の実情に合うように改変したりしている。これを「国風化」というのならば、それは九世紀以前の日本でも常に行なわれてきたことではある。あたり前ではあるが、唐風文化の時代にも日本的な要素は存在した。

一方の国風文化も、よく指摘されることだが、唐物は珍重され続けるし、仮名文学にも中国文学の影響は大きい。男性貴族にとっては、漢詩文の知識は必須の教養であり続けた。

特に唐物については、近年研究が大きく進んだ。唐物は広い階層に行きわたり、貴族の生活に不可欠の存在となっていた(中略)。唐物は現代のブランド品のようにあこがれの高級品でもあったが、香りを楽しむ たきもの 薫物の文化のように、原材料は輸入に頼るが調合法は日本で発展するといった、和漢融合の文化も生まれていった(中略)。

B このように、国風文化の時代にあっても中国文化はなお尊重されていたし、影響を与え続けていた。少なくとも国風文化を素朴に純和風の文化とみなすことは明確な誤りである。

以上の通り、国風文化に関する古い理解は、いくつもの意味で成立しなくなっている。国風文化は、九世紀までに入っていた中国文化の消化・吸収の上に成り立つ文化であり、唐物の愛好のように同時代の大陸の文物も入ってきている。その上で、従来以上に日本的な要素にも価値を見いだすようになる文化である、というのが現在の一応の共通理解だろう。

注1…神代から後一条天皇の時代ころまでを描いた歴史書。

注2…引用した部分の前にある前節のことを受けている。

注3…引用した部分の前の記述を受けている。

(小塩慶「『唐風文化』から『国風文化』へ」は成り立つのか」有富純也編『日本の古代とは何か 最新研究でわかった奈良時代と平安時代の実像』光文社、二〇二四年。一部改変)

設問1 傍線部Aに二つの誤解とあるが、筆者のいう二つの誤解とは何かを、二五〇字から三〇〇字で要約しなさい。

設問2 筆者は国風文化について傍線部Bのように理解しているが、国風文化に限らないで構わないので、日本の文化の特徴について外来文化と関わらせて、具体的な事例を挙げながら自分の考えを六〇〇字から七〇〇字で述べなさい。

【出典】

有富純也…編 磐下徹 十川陽一 黒須友里江 手嶋大侑 小塩慶『日本の古代とは何か 最新研究でわかった奈良時代と平安時代の実像』／光文社新書